創世ホール通信 No. 264

催し案内＋文化ジャーナル
2017年1月1日発行■北島町立図書館・創世ホール
電話088・698・1100◎ファクシミリ088・698・1180
771-0207◎徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91◎

北島迷店街ポスター展

1月17日（火）～31日（火）
10時～18時
＊1月19日（第3木）、1月23日（月）、30日（月）は休館

会場●2階ギャラリー　無料

主催●北島町商工会（☎088・698・2275）

■北島町に点在する様々なジャンルの商店12店舗の秘めた魅力を、県内在住のデザイナー、コピーライターが各々独自の視点と感性で、大判ポスター25枚に自由に表現。広告の枠を超えた見応えあるアートポスターとして展示します。

創世ホール名画観賞会24
「ベトナムの風に吹かれて」

1月21日（土）　2回上映
①10時半～　②14時～

会場●3階多目的ホール

入場料●大学生・一般／前売1000円（当日1300円）、小・中・高、シニア（60歳以上）の方は当日のみ1000円

作品●「ベトナムの風に吹かれて」（2015年、日本・ベトナム　114分）　出演＝松坂慶子、草村礼子、チャン・ニュオン、柄本明、奥田瑛二ほか　監督＝大森一樹　脚本＝大森一樹・北里宇一郎　原作＝小松みゆき

主催●創世ホール名画鑑賞会実行委員会（☎088・698・1100）

■ベトナム・ハノイで日本語教師として働くみさおの元に父の訃報が飛び込んできた。故郷・新潟で目のあたりにしたのは、認知症を煩い、父の死さえ理解していない母シズエの姿。みさおは、兄たちの反対を押し切り、ベトナムに母を連れてゆく決意をする■雪降りしきる越後から、熱気あふれるベトナムへ。人生の冒険はつづく■夢を追い、挫折を知った若かりしころ。喜びも悲しみも受け入れて今がある……。そんな人生の素晴らしさを歌い上げる感動作！

徳島ギターフェスティバル

1月22日（日）　13時半～

会場●3階多目的ホール　入場無料

演奏予定曲目●「カルメン組曲」「カバティーナ」「セビジャーナス」「ファルーカ」ほか

出演・主催●徳島ギター協会（川竹☎088・631・7893）

■創世ホール恒例の、徳島ギター協会会員による、クラシック及びフラメンコギターの演奏会です。

四方田犬彦◎講演会
白土三平の作品世界
漫画家生活60年を祝福する

2月12日（日）　14時半～（開場14時）

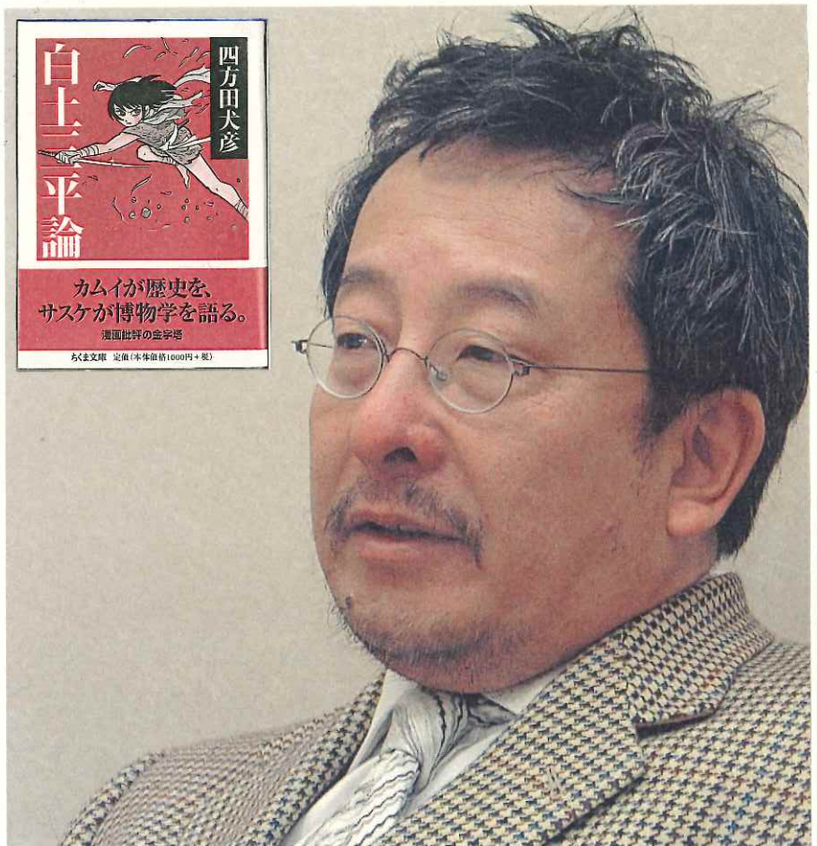
会場●3階多目的ホール　入場無料

講師●四方田犬彦（映画史・比較文学研究家。詩人。エッセイスト　神奈川県横浜市在住　63歳）

主催●北島町立図書館・創世ホール（☎088・698・1100）

特別協賛●㈱筑摩書房、㈱青林工藝舎

■我が国を代表する漫画家・白土三平。そのまぎれもない偉業を、俊才・四方田犬彦が四国徳島の地で縦横に語る奇跡の催し、ここに実現。興奮必至！　感動必至！　多数ご参集ください■恒例の創世ホール講演会に、ついに四方田犬彦氏が登場。2017年に漫画家生活60周年を迎える孤高の漫画家・白土三平の作品世界に迫ります。この時期、この種の講演会が実現できるのは日本で唯一北島町創世ホールのみです。圧倒的興奮でご期待ください！



笑福亭たま・旭堂南湖二人会⑩

3月19日（日）　14時～

会場●2階ハイビジョン・シアター

入場料●前売／大学生・一般1500円、小・中・高校生1000円（当日各500円増）

出演●笑福亭たま（上方落語家）、旭堂南湖（上方講談師）

演目●落語「らくだ」ほか1席（お楽しみ）、講談「難波戦記」ほか1席（お楽しみ）

主催●たま・南湖二人会実行委員会（☎088・698・1100）

■毎度おなじみ上方演芸界を背負う2人のプリンス笑福亭たまと旭堂南湖（きょくどう・なんこ）、ついに迎える10回目の二人会。今回も超満員必至！　健康増進・抱腹絶倒！　お見逃しなく。

■【講談「難波戦記」とは】◎15万の兵を率いる徳川家康を死の直前まで追い詰めた一人の男◎その名は上田の城主・真田左衛門尉海野幸村（さなださえもんのすけうんのゆきむら）！◎江戸時代より語り継がれるもう一つの結末――◎かつて徳川幕府に禁じられたある書物がひそかな人気を集めておりました◎それは戦国最後の大戦（おおいくさ）で真田幸村が恐れ多くも大御所・徳川家康公に立ち向かったお話◎あの真田丸の戦いの裏でいったい何が起きていたのでありましょうか◎禁じられた書物の禁じられたお話◎さあ、江戸時代より語り継がれる講談「難波戦記」をお聞かせいたしましょう。（旭堂南湖主演映画「講談難波戦記」予告編から謹んで抜粋引用）

文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

四方田犬彦さん講演会「白土三平の作品世界」にご期待下さい●小西昌幸

■2017年２月12日(日)14時半、創世ホールは著名な映画史・比較文学研究家でエッセイストの四方田犬彦（よもたいぬひこ）さんを講師にお招きし、講演会「白土三平の作品世界～漫画家生活60年を祝福する」を行ないます。私は、これからこの催しの企画担当者として、当該講演会についての思い入れのようなものを綴ってみようと思います。

■白土三平さんは、言うまでもなく日本を代表する漫画家の一人です。昭和７年（西暦1932年）2月15日生まれですから、今年２月の誕生日に満85歳をお迎えになります。手塚治虫も石ノ森章太郎も水木しげるも杉浦茂も既にこの世にいない今日（こんにち）の我が国で、《白土先生こそが存命人物の中で最高齢にして最高峰の大御所漫画家》と私が言っても、異論を唱える人はいないはずです。

■私が一番最初に接した白土三平さんの漫画は、『少年サンデー』での連作「忍法秘話」でした。小学生の時です。今も記憶に残っている作品がいくつもあります。例えば「たまかぜ」。無限流手裏剣の最高奥義を極めたいという野心を持った壮年忍者が、年老いた下忍オギにその術を披露するようしつように迫ります。老忍オギは、それだけはできないと男の申し出を拒み続けるのです。そして逆上した男は老人の右手首と左手の指を切り落とし、「これでお前は手裏剣など使えないだろう」と、高笑いします。老忍オギはここに至って、ついに男に奥義を披露する旨約束します。その奥義とは「たまかぜ」と名付けた秘術でした。老人の要請で、手裏剣を老人に向かって投げた男は、次の瞬間その手裏剣が自分の額に突き刺さっていることを知り、絶命します。その技は、指がなくとも手の甲や腕の部分で手裏剣を受け止め、それを直ちに投げ返すという、恐ろしい究極奥義ともいうべきものでした。ラストで、「たまかぜ」のたまは「みたま」のたまであり、この技の命名の由来はあの世から吹く風であり、必ず相手を殺さねばならぬ時に使う太刀のことなのだとつぶやく老人の、あくまでも温和なその表情が、実は想像を絶する極限の死闘をかいくぐった末に、到達・獲得したものだということを子ども心に認識しました。人を、見た目で侮ってはならない。私は戦慄しました。

■ほかにも、印象的なものがあります。「スガルの死」という作品は、抜け忍となり平和な家庭を築いていた女性忍者スガルが、命と引き換えに追手たちに復讐を果たすという物語です。戦いの場所を沼地に選び、そこでスガルは惨殺されるのですが、沼地に生息する貝を介在した風土病（寄生虫による日本住血吸虫病）に追手の忍者たちを感染させ、時間をかけて全員を死においやるわけです。非道な容赦ない不条理に、孤独に立ち向かう女性忍者のすさまじい執念が描かれていました。小学生だった私は、そのマンガで描かれた風土病が恐ろしくて、近所の堀で遊んでいる際にその病気に感染しないか家族に尋ねたりしました。

■連作「忍法秘話」は、名作揃いなのですが、とりわけ印象深いのが「ざしきわらし」です（初出は『ボーイズライフ』）。これは大きくなって再読し、不覚にも落涙しました。私は還暦で孫もいるのですが、今読んでも目頭が熱くなります。年老いた忍者・ダンズリの小助が主人公です。彼は下忍です。彼は身分の低い忍者が使い捨てにされる光景をたくさん見てきて、自分の仕事に疑問を持つようになります。そして、ある戦いで、完全におとりにされて、自ら片足（ひざから下）を切断して死地を逃れるという体験をします。その後、彼は抜け忍となります。彼は貧しい東北の村に赴き、ある一軒の家に住みつきます。その家には少年がいました。ダンズリは少年の前にだけ姿を見せます。少年はダンズリをざしきわらしの神様と思い込み、老忍者を慕うようになります。（以下、時系列順不同で印象的エピソードをメモすると）いじめっ子に喧嘩でやられそうになった時、ダンズリが助言し少年は勝利をおさめます。あるいは稲刈りの時にはこっそりダンズリが陰で手伝いをして、少年の家だけずいぶん仕事がはかどったりします。また少年が口蓋裂傷の少女をいじめているときには、核心をついてそれをいさめ、少年を改心させます（少年の家は父親が長期の出稼ぎに出ていて、それを「てて無し」と呼ばれて意地悪をされてきたことがあるので、「それはお前のせいではないだろう、ならば少女の口蓋裂症も彼女のせいではないではないか」という論理でいさめます）。少年の父親も戻り、ざしきわらしのおかげで少年の家は明るくなり、束の間の平和が訪れます。しかしそれは長くは続かず、村を襲った飢饉から一揆の波が押し寄せ、少年の父親もその中心人物となるのです。ある深夜、村人が少年の家を訪れ、少年の父親が処刑されたこと、役人たちがその家族を捕えにやってくるから、脱出せよと伝達します。着の身着のままで少年の家族は深夜に脱出を図ります。その時、ダンズリが姿を現わすのです。彼は少年に逃げ道を指し示し、「よいか、大きくなってわしが見えなくなってもわしはいつでもお前についている。わすれるな」と伝え、少年一家を送り出します。老忍・ダンズリの小助は、追手と対峙します。「フフフ、ここは通さんよ」不敵に笑みを浮かべ、追手に最後の秘術・月の輪を仕掛けて、全員を仕留めます。しかしダンズリの胸には、深々と刀が突き刺さっていました。彼は、「おれの一生も、おわりのほうにきて、めっぽうおもしろくなりよったわ」とつぶやき、息絶えます。

■白土さんの「ざしきわらし」は、手塚治虫「雨降り小僧」などと並ぶ、漫画史上屈指の名作短編だと私は思います。白土さんも強い愛着があると見え、自選短編集には何度も本作を収録しています（青林堂の『青林傑作シリーズ　傀儡（くぐつ）がえし』〔1979年11月〕、小学館の『ビッグ作家究極の短編集　白土三平』〔1998年２月、2013年３月〕）。私や私の友人たち（例えばノイズ・バンド《非常階段》のJOJO広重氏）は、アニメの日本版「ムーミン」に深く魅了され、私たちは、ムーミンと彼を見守り励ますスナフキンに、しびれたわけですが、白土さんの「ざしきわらし」には、スナフキン路線の原型のようなエッセンスが凝縮されていると私は考えています。私は、子どもの頃に佐々木守脚本＆実相寺昭雄監督作品の「ウルトラマン／故郷は地球」や「怪奇大作戦／京都買います」などと共に白土さんの「ざしきわらし」に出会えたことを誇りに思います。

■1981年５月に私は、東京阿佐ヶ谷の長井勝一さん宅を訪問しインタビューをしたことがあります（小西編集『ハードスタッフ』10号、11号に掲載）。その際、白土さんの仕事に触れて、『忍法秘話』は傑作揃いでしたという話をし、貸本マンガ誌『忍法秘話』に発表された作品と、私が『少年サンデー』で接した作品との関係についてお聞きしました。貸本はＡ５サイズなので、Ｂ５サイズの少年雑誌用に、白土さんの弟さんが既発表作品のコマを切り取り、再構成したものもあるということでした。

■私には、同年代のいとこが何人かいて、夏休みなどに親戚のうちに集まっては小学館のゴールデンコミックス版『忍法秘話』全８巻（1968年４月～1969年２月）を寝転がって読むというようなことをよくしていました。その『忍法秘話』は高校時代に、映画鑑賞の費用捻出のため古書店に処分し、大いに後悔しましたが（たぶん西部劇の「チザム」をみるためだった）、社会人になって、やはり生涯手元に置いておくべき書物であるということを認識し、また買いなおしました。『忍法秘話』は、その後、愛蔵版やコンビニ本でも刊行されました（実は、コンビニ本も、貸本作品の特別追加収録などがあって、意外と侮れないのです）。

■また、私に読書の楽しさを仕込んでくれた愛媛の叔父が、コダマプレス版『真田剣流』（全３巻）や集英社のコンパクトブックス版『風魔』（全２巻）を里帰りのお土産に払い下げてくれたことがあり、それらも宝物になりました。それは私の小学校６年の終わりか中１の初め頃のことですが、その後、ゴールデンコミックス版『カムイ伝』全巻も払い下げられました。その叔父は病気が原因で40代で亡くなりました。彼が白土作品とＳＦの魅力を私に教えてくれたのでした。

■2016年３月に当館は、カメラマンで文筆家の地引雄一氏講演会（演題「東京ロッカーズからプロジェクトFUKUSHIMA! へ」）を開催しました。同年２月、その詳細打ち合わせのため、私は地引さんのご実家（千葉県の五井）を訪問したのですが、その際、古い書棚に白土作品や『ガロ』がずらりと並んでいるのを見て非常に共感を覚え、大いに納得するものがありました。私も地引さんも白土作品という共通基盤を持っていることを知ったのです。自分の企画に間違いはなかった、この路線で正解だったと、その時私は強く確信したのでした。白土作品という共通の土壌があることで、地引さんとの信頼も一層強まったと思います。ですから、今年の創世ホール講演会は、私の中では昨年の企画から明確に、一直線につながっているわけであります。

■四方田犬彦さんとは、不思議なご縁があります。私が就職してためた預金をはたいて1000部作った『板坂剛の世界』（1981、先鋭疾風社）にご注文をいただいたのです。完成した本をお送りしたら、すぐていねいなお礼状をいただきました。それで板坂さんの第２弾『世紀末文化考』（1984、同）にはカバー折り返しに推薦文を書いていただきました。

■初めて直接お目にかかったのは、「長井勝一氏を偲ぶ会」のときでした（1996年２月13日、アルカディア市ヶ谷）。その次は、高知県立美術館の映画イベント「ザッツ・アジアン・エンタテイメント」（1998年４月19日）での講演会の時です。私はロビーで、持参した『リュミエールの閾(しきい)』にサインをいただきました。前にもお会いしましたよねと言われ、長井勝一さんを偲ぶ会でしたと答えると、ああアルカディア市ヶ谷ですねと四方田さんはおっしゃいました。そして３度目が先日のＪＲ横須賀線保土ヶ谷駅の喫茶店でした。

■創世ホール講演会の熱心な支持者の方からは、いつか四方田さんを呼んで下さいと、かなり以前から要望を受けていました。とうとうそれが実現し、四方田犬彦さんが当館の歴代講師先生の系譜に連なります。感無量です。四方田さんは映像資料を駆使して講演して下さる予定です。もちろんこの時期、日本でこんな催しができる公立文化施設は創世ホールだけです。どうかこの講演会に絶大なご支援をお願いいたします。（文責＝北島町立図書館・創世ホール嘱託**小西昌幸**　2017年01月12日脱稿）

【お知らせ】●北島町立図書館では、１月下旬から２月12日まで１階図書館カウンター前で、四方田さん講演会関連特別企画として、1960年代の『ガロ』（表紙絵は白土作品）、白土三平さんの単行本などを展示します。『忍法秘話』はゴールデンコミックス版、愛蔵版、コンビニ版を網羅したいと思います。その他、様々な白土作品集を並べたいと考えています●「文化ジャーナル」次号でも私の好きな白土作品（主に短編）についての感想を書いてみるつもりです。（小西）